

# 簡單テスト

愛育研究所 森 脇 要

母「ね、二郎さん、今日はお母様とお話をさせよう。あのね、若し貴方が人のものを毀したら、貴方はどうしますか」

子「僕毀さないよ」

母「そうですね、二郎さんはお利口だから、人のものは毀しませんね、でもね、若しも毀した場合は貴方はどうするの」

子「怒つちやふの」

母「あら、二郎さんが怒つちやふの」

子「違ふよ、その僕が玩具を毀した人」

母「そうですね、玩具を毀された方が怒りますね、でも二郎さんはどうします」

子「僕、僕ちあ又作つてあげる」

母「そうですね、作つてあげてもいいですね、でもそんな時には御免なさいって言ふでせう。ちあね、若し貴方が幼稚園へ行く途中で遅れるかも知れないと気が

ついた時にはどうしますか」

子「僕行かないや、歸つちやふの」

母「そう、歸つちやふの、でもそうすると幼稚園はお休みになつちやつて、先生とお話やお遊戯が出来ないでせう。」

子「うん、わかつたよお母さん、大急ぎで、かけ出して行くの」

母「そう、二郎さんはお利口ね、ちあね、若しも貴方がよそへ出る時、雨が降つてゐたら、どうしますか」

子「かっぱを着て行くの」

母「そう、二郎さんは幼稚園へ行く様になつて、すつかりお利口になりました」

満六歳になりますと、大抵の子供は是等の間に正しく答へられる筈です。貴方の御子様は何とお答になるでせうか。

## 母の讀みもの

石森延男氏著

### 「幼な子へのお話」

これは石森氏の近著です。母のためにと添へ書きしてあります。たゞのお話集ではありません。母が自分で新らしいお話をつくつて、それをわが子に話してやることを勧めてゐる、新らしい意見の本です。そして、そのつくり方が、美しい例といつしよに、丁寧に説いてあります。

又、お話をするに就て、よく考へてゐなければならぬ導きが、いろ／＼擧げてあります。かういふ本こそ、ほんとうに母の爲になる本です。そして、お話のことに就てばかりでなく、母としての我子への接し方といふものが、誰れでも考へずにもられなくなる本です。挿繪も美しく高尚です。是非皆さんの一讀をおすすめします。(東京神田神保町三丁目一九 横山書店發行。定價一圓六十錢。送料十錢)